

アトリエ 琉游舎 だより 134号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年6月29日発行

五月雨に物思ひをれば時鳥 夜深く鳴きていづちゆくらむ

- 前号の「目には青葉 山ほととぎす 初鯉」の陽光のもとで詠まれた句とうって変わって、今回は深夜「物思う」平安歌人紀友則の内省的な和歌を古今和歌集から取り上げてみました。
- 「五月雨の音を聴きながら物思いに耽っている深夜、ほととぎすが夜更けの空を鳴きながら飛んでいくのが聞こえる。ほととぎすはどこへ行くのだろうか。私もどこかへ飛び去ってしまいたいのだが、、、」というような歌意でしょうか。五月雨は旧暦五月の雨、梅雨のこと。
- 五月雨、つまり梅雨のころの夜の暗さを「五月闇」といい、月も出ない鬱蒼とした闇の中は物思いに耽るにはうってつけの季節です。紀友則の「物思い」の原因はなんだったのか。恋の悩み仕事の悩み病気や対人関係。人の悩みは古今東西たいして変わりはないものでしょう。
- 平安貴族は時間がたっぷりあり仕事に追われることもなかったのでしょうか、この和歌を含めて彼らの表現は「物思い」をネタにして思い悩む自分を愛おしみ誇っているように聞こえます。今も昔も、物思いどころか生きることで精一杯という人々がほとんどのはずですが。
- 「物思い」は夜の暗い中で一人するものと思われがちですが、その様な環境に置かれた私はその間もなくすぐに眠りに落ちてしまいます。私の「物思い＝悩み」はコーリーナの明るい陽ざしを浴びながら自然の中を散策することで頭からきれいに洗い流されることに気づきました。「物思い」が頭の中に在るうちはなかなか眠りにつけませんが、昼間のうちに空っぽにしているので、私はぐっすり熟睡できるのです。これが私の安らぎの処へ歩む健康法です。
- 「物思い」をする人は思慮深く、教養があり、沈着な人と思われがちですが、私はその反対に「能天気」に過ごす方が毎日を楽に過ごせると考えます。辞書には「軽薄でもこうみずであり、のんきでばかっていることや、そのさまやひと」とあります。「気楽・のんき・太平楽・左団扇・のうのう・のほほん・無頓着・いい加減・ノンシャラン」と同義です。眉間に皺を寄せて主義主張に基づいて世界を物思いするよりは、私たちがのほほんとして過ごす社会について、気楽に暢気に考えた方が平和で豊かな暮らしに近付けるのではないのでしょうか。
- 仏教徒の私が考える能天気は何も考えないことではありません。我見にこだわり思い悩むことから解放され自由になることです。縁起の法則に従ってありのままに観ることです。選挙があります。将来の物思いから自由になるためにも、能天気投票に行ってみてください。
- 6月末は五月雨のど真ん中のはずですがもう梅雨明けのようなノー天気が続いています。この酷暑を物思いするよりは、能天気になり過ぎた方が熱中症対策になるかもしれませんね。

読書会

5月からは法華経を読みます。2回目の法華経読書会です。分かり易く楽しい会です。資料はすべてご用意いたします。皆さんの参加をお待ちしています。

7月12日26日
(火)13時半

写経会

般若心経・自我偈・観音偈の手本7月10日(日)を用意しています。初めての方も13時半 すぐにできます。

6/30 木	13時半	北西騎馬警官隊 (120分)	ゲーリー・クーパー主演。1885年カナダ北西部で、先住民の混血族メディス率いる反乱軍と北西騎馬警官隊との戦いを描いたセルシ・デミル監督の大作映画
-----------	------	----------------	--

7月7日14日21日28日の映画会はお休みします

先日四回目の七面山登山をしてきました。一回目は六歳の時。祖父が住職をする松山の寺の檀家参拝に栃木から母と伴に参加したと、相当大きくなって教えられたため一回目の登山に換算できるのですが、当時はどの山になんのために登ったのか分からないままの邪気のない山登りでした。二回目は八年前の夏の終り、私の師匠と彼の得度したばかりの十歳の長男、私と妻の四人で霊山への御挨拶登山です。三回目は五年前の日蓮宗公式修行の総仕上げ、信行道場での登山。修行の一環ですから白装束に手甲脚絆地下足袋に網代笠をつけ、題目を唱え続けながら、団扇太鼓の音に合わせて足をひたすら前に繰り出すという、修行登山です。

七面山は山梨県南部にある標高**1,982**メートル日本二百名山のひとつです。東側には日蓮宗総本山久遠寺のある身延山。富士川を隔ててその遙か先には富士山がそびえ立ちます。西は北岳を代表とする南アルプスの山塊。東西を日本第**1**と第**2**の高さの山に挟まれた屏風のような山容の山です。しかし法華経信者にとって七面山は聖地の山なのです。もともとは山岳信仰の霊山として七面大明神が祀られていたと思われませんが、日蓮聖人が**1274**年に身延山に入山されてからは法華経を守護する七面大明神を祀る山として、今に至るまで多くの法華経徒が訪れる法華信仰の山となりました。日蓮聖人と七面山のいわれは「ある時、日蓮聖人が説法をしていると聴衆の中に美しい女性が熱心に聞いていました。他の信者はその女性を誰も見知っておらず、いぶかしく思っていたところ、聖人が女性に本当の姿を見せてあげるように告げると『私は七面大明神、身延の山と南無妙法蓮華経と唱える者を守護します』と言って龍の姿となって七面山の方へ飛んでいった」という伝説が残されています。それから**750**年ほどたった今も、日蓮宗の信者に限らず多くの法華経信仰者が訪れる聖地です。山道は大変きれいに整備され、いわゆる山登りとは異なった趣です。登山の目的は通常頂上に登ることですが、信者は山頂間近の広い平坦地にある身延山久遠寺に属する敬慎院に登詣し、身延山を守護する七面大明神にお詣りすることにあります。そして敬慎院の僧坊に一泊して下山をします。道のりは登山口から敬慎院までは全部で**50**丁あり、各丁に石灯籠が建てられ、これを目安に敬慎院がある**50**丁目を目指します。途中で休憩所を兼ねた僧坊茶屋が四ヶ所。そこでお堂に向い経を唱え休憩を繰り返しながら敬慎院を目指すことが信者の登山です。標高差は**1500**メートルほどあります。永遠とも思える九十九折りが続き景色の変化も乏しく、ただひたすら足を上に向け登り続ける単調な登山ですが、信仰心さえあれば**90**歳のご老人でも六歳の子供でも、毎日でも、ゆっくりと**6**時間も時間をかければ誰もが登ることのできる山です。

今回の登山目的は純粹に頂上を目指す通常登山です。敬慎院から頂上往復を**1**時間プラスと考え往復**7**時間の予定で朝**8**時半に登山口から登山を開始しました。当日は梅雨明け直前の蒸し暑さと気温の上昇で、**15**分も登ればタオルは汗でびしょ濡れ、用意した飲料水もみるみるなくなってくる有様です。暑さ対策は充分したつもりですが、湿度**100%**の雲の中を歩いているような状態が**2**時間も続いた結果、**36**丁目を過ぎたあたりで足が動かなくなってきました。水分と塩分が汗で大量に流れ筋肉が軽いけいれん症状を見せてきたようです。今までにない状態に頂上を諦め、敬慎院までは何とか辿り着き、七面大明神にお詣りして戻ることに変更しました。登山中にこれほどの足の筋肉痛は今まで経験したことはありません。天候以外で予定を変更したことも一度もありません。真東に見える富士山も足下に見える身延山も全く臨めないままに下山を始めると、今度は妻が蛭に足首**2**箇所の血を吸われたり、蛇に遭遇したり、下り続きの足がダメージを受けてがくがくと震えが止まらず足下がおぼつかなくなったりと、四回目の七面山登山から這う這うの体で退散しました。

散々な結果に終わった四回目の七面山登山の原因はいくつも考えられます。朝**4**時起き、**4**時間近くの運転の後の強烈な暑さと湿度の中での今年最初の登山。年齢の衰え、過去の経験から来る過信。無理な行動計画などきりがありませんが、一番の原因は七面山登山への喜びと敬意がなかったことです。過去三回の「邪気のない登山」「御挨拶登山」「修行登山」は「ありのままの登山」「信の登山」「行の登山」でした。それぞれの山登りは、七面山と対話しこの山と一緒にその時のありのままの瞬間を堪能する山登りだったのです。最初の登山に限らず、二回目も三回目もいつも最初の登山なのです。山と私との因縁は登る度に新しい喜びをもたらします。登山家はそれをどう表現するのか知りませんが、私は山登り好きの宗教者なので、それを大いなるものとの出会いに包まれる喜びと表現します。七面山が法華信仰の山だからではありません。山の頂上に立ったときに触れる、ありのままの自然（人々が神や仏や宇宙の真理などと呼んできたもの）に出会うことの喜びは、常に新たな喜びなのです。それはまた私の中の新たな仏に出会うことでもあるのです。

四回目の山登りで私は、過去の登山で七面山については何もかも知っているつもりになってそこに登る喜びと対話を望もうとしませんでした。登るという信行に喜びを見いだそうとしなかったのです。何も知ってはいないのに知っているつもりになっている者を「増上慢」と言います。仏教ではまだきちんとした悟りを得ていないのに、すでに悟っていると思いついてる状態を指す言葉です。私は四回目の七面山については増上慢だったのです。私たちは知っていることなど何もないのです。唯一知っていることは、ありのままの世界があるということだけです。そしてその世界は増上慢には決して観ることの出来ない世界なのです。

登山後**4**日たってもまだ筋肉痛が治まりません。この筋肉痛は七面大明神の戒めの痛みです。私に増上慢であることを教えてくれたこの痛みへの感謝とお礼の **琉游舎：戸井 出琉・恭子**
ために、「報恩謝徳登山」を近く予定しなければなりません。いつもあり **問い合わせ：0287-53-7848 08033508152**
のままなのに常に新しい七面山と一体となる、五回目の登山です。 **矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850**
メール：toi10lizuru@outlook.jp